



Title	シンボル形式の哲学における科学性：エルンスト・カッシーラーにとっての新カント派／カント派の意味と意義
Author(s)	濱田, 洋輔
Citation	Sprache und Kultur. 2023, 42, p. 5-23
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90038">https://doi.org/10.18910/90038</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# シンボル形式の哲学における科学性

——エルンスト・カッシーラーにとっての新カント派／カント派の意味と意義——

濱田洋輔

エルンスト・カッシーラーとウィーン学団（オットー・ノイラート、ルドルフ・カルナップ、フィリップ・フランク、中でも特にモーリッツ・シュリック）とは互いの意見の相違にも関わらず、科学（の成果）を重視するという点では同じ方向を向いており、互いに高く評価し合い影響を与え合う関係にあった（Friedman 1999; Krois 2000; Mormann 2016; Möckel 2018）<sup>1)</sup>。また、ウィーン学団と密接な関係にあり論理実証主義を代表する一人とされる——カッシーラーの下で学んだ時期もあった——ライヘンバッハともカッシーラーは生涯を通じて知的な遣り取りを交わす親しい関係にあった（ECN18: 237-239; Heis 2013）。

今日の科学哲学の源流に位置付けられる哲学者達とのこうした密接な関係にも関わらず、カッシーラーの「シンボル形式の哲学」が科学哲学あるいは科学性の文脈で語られることは多くない。カッシーラー研究外にあってカッシーラーの哲学が語られる際に最も一般的なのは「新カント派」という枠組みであるといつて良いであろう。一方、（新カント派という呼称をカッシーラーが好んでいなかったことが知られている）カッシーラー研究にあっては、新カント派という枠組みよりも「文化哲学」という枠組みの方が圧倒的に好まれているといつてまず間違いないであろう。一般的に言えばそのように、カッシーラー研究者とそうでない哲学研究者の間にはカッシーラー哲学の分類に関して認識上のずれがあるように見受けられるが、カッシーラー哲学の科学性を主題化した論述・研究は、カッシーラー研究内外に関わらず少数であるといつて良いように見受けられる（Ihmig 2001: 3; Möckel 2018: 445）。

そうした状況にあって本稿は、ウィーン学団との対比を通じて、科学性という観点からカッシーラー哲学の根本特徴と全体像とを明らかにすることを目的とし

ている。その際、科学性という観点は「新カント派」という観点と結び付けられることとなるが、ここで問題となるのは世間一般がカッシーラー（その他）に付与した意味での新カント派ではなく、カッシーラー自身が考えていた意味での新カント派——カッシーラーの意向に沿ってより正確に表現すれば、彼自身が考えていた意味での「カント派（カント主義）」——である。纏めればつまり、本稿の主要課題は、カッシーラー自身にとっての新カント派（もしくはカント派）の意味を明らかにすることを通じて、またウィーン学団との対比を手掛かりとして、科学性という観点からカッシーラー哲学（＝シンボル形式の哲学）の根本特徴および基本構造を描出することにある。本稿の最後には、以上の主要課題に加えて、カッシーラーの考える意味での（新）カント派が有する今日的な意義も併せて簡潔に示唆しておきたい。

## 1.

新カント派を代表する一人とされるパウル・ナトルプへ宛てた手紙（1922）の中で、現象学の創始者であるエドムント・フッサールはナトルプ（及びヘルマン・コーエン）の弟子であるカッシーラーについて、次のようなことを書いている。カッシーラーは『認識問題』その他の著作によって、彼が極めて稀有な歴史家（哲学史家）であることを示したが、彼の哲学的営為は、「生死を賭けた個人的な奮闘」だとか「個人的（独創的）な思考の産出」だとか呼べるようなものではなく、我々のように真に独創的な哲学を志向する者はカッシーラーに「見られる種類の偉大さに親しむべきではないであろう」(Husserl 1994: 147-148)<sup>2)</sup>。

つまり、カッシーラーは優れた哲学史家ではあるが、優れた哲学者ではないとフッサールは言うのである。この手紙が書かれた当時、カッシーラーは認識論の歴史を扱った著作『認識問題』の作者として有名になっていたが、彼自身の独創的な哲学を展開した主著『シンボル形式の哲学』はまだその第一巻（1923）も出版されていなかった。であれば、フッサールがカッシーラーを哲学史家とみなしていたのも無理のないことであった。しかし、『シンボル形式の哲学』が発表されて以降となると事情はまた別である。フッサールは1925年のカッシーラー宛ての手紙で直接に、『シンボル形式の哲学』の第二巻を哲学史の観点からではなく純粋に哲学的観点からに非常に高く評価していること、またそれを何度も深く読

み込んだことを伝えている (Husserl 1994: 3-4)。

そのように『シンボル形式の哲学』の発表によって、フッサールもまたカッシーラーの哲学者としての独創性を認めるに至った訳であるが、ナトルプ宛ての手紙に表明されたカッシーラーに対するフッサールの上記の批判的な言葉は完全的外れという訳ではない。というのもカッシーラー哲学の独創性は、彼の哲学史家としての能力と密接に結びついているからである。

カッシーラーの哲学は、過去あるいは現代の哲学者たちの議論を丁寧に紐解き、それを肯定あるいは批判しながら自分自身の論を展開して行くというスタイルをとっている。もちろん他の哲学者がそうした議論展開と無縁であると言う訳ではないが、他の多くの哲学者と比べて、カッシーラーにあってはそうしたスタイルが極めて顕著なのである。

哲学史家としてのカッシーラーは、哲学史を叙述する為には歴史的な問題意識だけでは不十分であり、諸哲学問題についての体系的な理解が不可欠であると考えていた (ECW2: X; ECW23: 194)。一方、哲学者としてのカッシーラーはそれとは裏返しに、自ら哲学問題に取り組む際には哲学史 (及び同時代の他の哲学者の考え) を熟知しその助けを借りることが極めて重要であると考えていた (ECW22: 323)。つまりカッシーラーの哲学は彼の哲学史研究に裏付けられている訳であるが、そうした事態こそが、ここにおいてまず問題となるカッシーラーにとっての「(新) カント派」(あるいは「マルブルク学派」) の意味に直結している。

哲学するにあたっての哲学史理解の重要性について、カッシーラーの考えが最も明白に見出せるのは恐らく、彼がその師コーエンの哲学的態度について述べた次の言葉であろう。彼はコーエンの死後、その弔いに際してこう述べている。

『カントにおける倫理学の基礎付け』という著作の序言においてコーエンは、大規模で恒常的な歴史的共同作業を無視したあらゆる哲学 (的態度) に対して、つまり、[哲学史を省みず]「独力のみ頼る哲学 (的態度)」に対して、鋭く力強い言葉で異論を唱えた。……彼は自らが……観念論哲学の大きな連鎖の中の一環であると感じていた。つまり、プラトンからデカルト、デカルトからライプニッツ、カントへと通じる偉大なる連鎖の一環であると感じていた。[彼が感じていた] こうした体系的な繋がりの方に、コーエンに

とって、全ての歴史的な過去は、現代そのものとなっていた。……彼は哲学の歴史を一つの出来事・過去のものとして語らなかった。そうではなく彼は、——吟味し・考慮し・判断し・立場決定しながら——そうした哲学史の流れそのものの真只中に立っていた。……コーエンは……ただ哲学の歴史を教えただけではなく、彼はその歴史の一部であった。(ECW9: 491. Cf. also ECW9: 119)

こうしたカッシーラーの師コーエンに対する言葉は、カッシーラー自身にも該当する。カッシーラーもやはり、哲学の営みは(西洋)哲学史全体の潮流の一部としてこそ意味を持つものであると考えており、また、——彼がどこまでプラトン、デカルト、ライプニッツを自らの先駆者と意識していたかはここに答えることは出来ないが——自らをカント観念論哲学の系譜上に位置付けもしていたのである(ECN7: 93-119)。

膨大な哲学史の知識を自身の哲学的営為の糧としたカッシーラーが、カント以外の様々な哲学者・思想家から影響を受けていることは忘れてはならないが、それでもやはり、カントほど根本的かつ重要な形でカッシーラーの哲学に影響を与えた哲学者が外にいないこともまた事実である。カッシーラーの哲学はカントの超越論哲学を基盤としている。換言すればカッシーラーの哲学は、カントの『純粹理性批判』に倣って、客観的妥当性を有する経験を可能ならしめる諸条件(諸認識能力)を探ることを根本課題としている。こうした意味に限定すれば、カッシーラーは生涯に渡って自らも認める忠実なカント主義者(Kantianer/Kantian)であった(ECW19: 6-7, ECW 22: 169; Cassirer/Heidegger 1991: 294)。

しかしここで強調しておくべきは、彼があらゆる点においてカント哲学に忠実であった訳ではないということである。コーエン、ナトルプ、カッシーラーに代表され、新カント派の重要な一角を担うとされるマールブルク学派は、しばしば単なるカント信奉者もしくは純粋なカント研究者とみなされてきたが、それは全くの誤解である(ECW19: 6)。マールブルク学派にとってカント哲学は決して不可侵の聖典ではなく、刷新されねばならぬものであった。ナトルプおよびカッシーラーの共通見解によれば、マールブルク学派にとっての「不動の根本思想」(Natorp 1912: 196)とはカントの方法論=超越論的方法論のみであり、その方法をどの分野・対象にどのように使用し、そこからどのような哲学を生み出すかに関しては、

完全に各自の自由であった (ECW19: 6-7; Natorp 1912: 193-194)。本稿で問題となっているのは「新カント派」の意味であるが、ここでマールブルク学派の根本態度に触れたことにはむしろ意味がある。というのも、カッシーラーは上記のようなマールブルク学派の態度にこそ、広く新カント派と呼称される思想家全般に妥当するものを見ていたからである。

カッシーラーは基本的に、自身が新カント派 (Neukantianer/Neo-Kantian) と呼ばれることを喜ばなかった。彼は、世間に新カント派の特徴とされているものはしばしば、自分の哲学とは正反対のものであると不満を述べている (ECW22: 169)。またダヴォスでのカント解釈を巡るハイデガーとの公開討論の席においては、「新カント派」とは当時の哲学界における「贖罪の山羊 (スケープゴート)」<sup>3)</sup> であるとも言っている (Cassirer/Heidegger 1991: 274)。様々な哲学者を新カント派という言葉の下に十把一絡げに批判するハイデガーに異論を唱える為であろう、その席でカッシーラーは、実際に存在する新カント派の哲学者というものを自分は知らないと言っている (Cassirer/Heidegger 1991: 274)。

しかし実のところ、カッシーラーは「新カント派」の存在を完全に否定していた訳ではない。彼はハイデガーによる——ハイデガー自身の形而上学・存在論に寄せた——強引なカント解釈を批判した論文の中で、ハイデガー流の不当なカント解釈と対比させる形で新カント派の基本特徴を以下の様に説明している。

全ての著名な「新カント派」の代表者たちは、少なくとも次の一点において意見の一致をみている。つまり、カント〔哲学〕の体系の眼目は、彼の認識論の中に探るべきであるという一点において、換言すれば、科学 (学問) (Wissenschaft) における事実とそうした事実の「可能性」〔を探る問い〕こそがカントの問題設定の出発点でありまた目的であるという一点においてである。新カント派の代表者〔と目されている哲学者〕たちにとっては、こうした問題設定に、どこかこうした問題設定のみに、カント哲学の科学的特徴と科学的な優位とが存している。(ECW17: 222、後半の傍点筆者)

こうしたカッシーラーの言葉は、彼以外の著名な新カント派の共通特徴を客観的に叙述しただけのものではない。この論文において——少なくともこの論文だけにおいては——カッシーラーは自らを積極的に新カント派の列に加え、新カ

ント派のカント解釈とその解釈に基づいた哲学実践を正当なカント解釈、正当なカント流の哲学実践として描出しているのである。つまりここでカッシーラーは、科学・学問における(客観的な)事実を可能ならしめる諸条件・諸認識能力の探求を主要問題とするという科学性にこそ、カント哲学及び(自身の哲学を含めた)新カント派哲学の根本特徴と長所があると主張しているのである。

先にも触れたことであるが、ここで重要なのは、カッシーラーの考える「新カント派」にとって、カントが科学という名のもとに理解していた具体的内容が重要なのではないということである。カッシーラーにしてみれば、カントが生きていた当時の諸科学・諸学問の状況に留まる必要はないどころか、留まるべきではないのである。「ナトルプのカントに対する関係は、現代物理学者のガリレイやニュートン、マクスウェルやヘルムホルツに対する関係と同じである」(ECW19:6)とカッシーラーは書いているが、これは科学の発展に伴って、カント哲学もまた刷新されなければならないということの意味している。

同じ諸科学の成果に浴する同時代の新カント派の哲学者であっても、同じ結論に至るわけではない。新カント派の哲学者たちは単なる機械的作業を行っている訳ではなく、それぞれ固有の問題意識と科学理解に基づいて個々独自の哲学を営んでいるのである。したがって、同時代のコーエン、ナトルプ、カッシーラーなどが、それぞれ別個の哲学体系に至ったことは不思議ではないどころか当然とさえいえるのである<sup>4)</sup>。纏めればつまり、カッシーラーの考える「新カント派」(中でも特にマルブルク学派)の主要課題とは、新しい時代の科学・学問知識を学ぶことによって、時代的制約の為にカントが留まらざるを得なかった先へと——各々独自の問題意識・各々独自の方法によって——超越論哲学を刷新・推進して行くということにあった。

カッシーラーの新カント派理解についての説明は以上であるが、カッシーラーが概して新カント派というレッテルを快く思っていなかったということはここで改めて注意しておいて良いであろう。というのも、科学の発展に基づいたカント超越論哲学の刷新・推進をカッシーラーやナトルプは新カント派 (Neukantianer/Neo-Kantian) の主要命題としてよりはむしろ、カント学派 (Kantianer/Kantian) の主要命題と考えていたのである。彼らにとっては、カント哲学を研究しその功績を称揚するだけでは、決して真の意味でのカント学派とはなり得なかった。彼らにしてみれば、カント哲学の神髄を真に理解しそれに共鳴した人間は、「哲学

においては、〔絶対的な知識を与えてくれる〕『古典的著者』の存在すべきでないことを繰り返し強調していたカント自身」(ECW 19: 6)と同様、独自に超越論哲学を実践するはずであった。つまり、現代諸科学の成果を基に自らのオリジナルな超越論哲学を形成しようと試みるはずであった。彼らにとっては、そうした人間こそが真の意味で「カント学派」あるいは「カントの弟子」と呼ばれうるものであった (ECW19: 6-7; Natorp 1912: 193-194)。

このように、カッシーラーからすれば新カント派 (マールブルク学派) の哲学実践とは、現代諸科学の成果に基づいた正統な「カント学派」としてのカント哲学刷新の試みだったわけであるが、その試みの内実を明らかにするために以下ではまず、ウィーン学団との比較を通じてカッシーラーの科学観の主要な特徴を示したい。

## 2.

先に触れたカッシーラーとハイデガーのカント解釈を巡る対立は、二人の科学観とも無縁ではない。カント哲学において科学性を重視するカッシーラーにとっては、哲学的諸問題の解決は現代諸科学との共同作業なくしては有り得なかった (ECN8: 133-134)。他方、ハイデガーは諸科学に対する哲学 (存在論) の根本的優位性を主張し、科学との共同作業や具体的な科学的知識・科学理解を不要とした (ハイデッガー 1994: 50-51; ハイデッガー 2001: 41-46)。この観点からすれば、ウィーン学団 (論理実証主義) は完全にカッシーラーの立場にある。

数学者、物理学者であると同時に哲学者でもあったウィーン学団の一人フィリップ・フランクは、カッシーラーへの手紙 (1937<sup>5)</sup>) の中で、自分がカルナップやシュリックと同じ論理実証主義の立場にあることを明言した上で次の様に書いている。

私が私の著作の中であなたの〔哲学的〕立場について批判的な言葉を述べたとすれば、それはあなたの見解が多くの点において我々に非常に近いからに他なりません。……あなたの科学に対する見解は〔私たちのものに似て〕他のどの哲学者よりも論理的構造を前面に押し出しています。もしあなたの見解を一貫した形で更に発展させるならば、私の考えでは、あなたの見解は

……カルナップ流の見解に至ることでしょう。(ECN18:176)

カッシーラーの考えを一貫して推し進めて行けばカルナップ流の考えに至るであろうというフランクの主張は実のところ認められるものではない。科学は哲学にとって必要不可欠であるという点ではカッシーラーとカルナップは意見の一致を見ていたが、両者の科学観の間には大きなずれが幾つか存在しているのである。科学における論理的な構造とは恣意的(慣習的)なものであるかア・プリオリなものであるかという問題もその一つであるが( ECN18: 50-51, 176; Heis 2014)、ここではカッシーラーがそれより遥かに重視していたもう一つの問題を取り上げたい。

カッシーラーはカルナップとライヘンバッハが創刊した雑誌 *Erkenntnis* に、ウィーン学団流の実証主義を批判する論文を載せる準備をしていたが、ウィーン学団の中でもとりわけ親しかったシュリックが急逝したことによりその意欲を失ってしまった( ECN18: 151)。果たしてカッシーラーがその論文を完成させることはなかったが、その論文のための準備と考えられる遺稿( ECN4) から、カッシーラーがウィーン学団のどのような考えを批判しようとしていたかは明らかである。

その遺稿の中でカッシーラーが根本的な問題としているのは、ウィーン学団——カッシーラーが主に引き合いに出すのはカルナップ——が、カッシーラーが「表情現象 *Ausdrucksphänomen*」(あるいはその現象を可能にする「表情機能 *Ausdrucksfunktion*」)と呼ぶ現象(あるいは機能)を科学的・客観的に扱ひ得る要素とは認めず、科学および哲学の世界から締め出してしまったということである。では、「表情現象」とはなにか。表情現象というのは、要点だけに絞って言えば、認識された事物が単なる物理的なものとしてではなく、喜ばしいもの、恐ろしいもの、愛らしいもの、憎々しいものなどといった「表情」を伴って現れる現象のことである。つまり表情現象とは、事物が感情を惹起するものとして現れて来る現象のこと、より端的に言えば、情動体験を伴った現象のことを意味している( ECW 13: 70-74, 93; ECN 2: 93 -97)。この表情現象はカッシーラーの考えでは、事物が「表情」を伴わない単なる物質として捉えられる(自然科学の基礎となる)認識に先立つ根源的な現象である( ECW13: 98-102)。ウィーン学団はこの無視すべからざる根源的な現象を、その存在こそ否定しないながら非客観的な

のとして、科学的・客観的世界から追放してしまった、とカッシーラーは批判するのである（ECN4: 177, 201-202, 213; Friedman 2000: 122-127; Möckel 2018: 325-343）。

カッシーラーの考えによれば表情現象（≡情動体験）は<sup>・</sup>人<sup>・</sup>文<sup>・</sup>学<sup>・</sup>（Kulturwissenschaft / Geisteswissenschaft）において特徴的かつ必要不可欠な要素・対象なのであるが、この点からすれば、カッシーラーにとってのウィーン学団の問題点は、扱う人文科学を科学的客観性の外に置いたことにあると言える（ECW24: 391-413; ECN4: 201; Möckel 2018: 336）。これは裏を返せばまた、カッシーラーが人文科学独自の手法にも科学性・客観性を認めていたことを意味している。各々程度の差こそあれ、数学・論理学・物理学を全ての学問の基盤あるいは模範とした物理主義的立場のウィーン学団（論理実証主義）に対し（Friedman 1999: 145; Damböck 2013: 237）、カッシーラーは人文科学にも自然科学と同等の価値と意義とを認めていた。つまり、ウィーン学団の物理主義的一元論に対して、カッシーラーは（人文科学を含む）それぞれの学問分野に独自の自律性を認める多元論的な立場を取っていたのである。

『シンボル形式の哲学』第一巻（1923）の序文にカッシーラーは、この著作の発想は元をたどれば『実体概念と関数概念』（1910）における主に数学・自然科学（特に物理学）を対象とした研究に行き着くと述べた上でこう書いている。

こうした〔『実体概念と関数概念』における〕研究の成果を人文科学の問題の取り扱いにとって意義あるものとしようとする試みの中で、従来の〔＝数  
学的・物理学的〕解釈と枠組みにおける一般的な認識理論は、人文諸科学  
の理論的基礎付けのためには不十分であるということがますます明白になっ  
て来た。……〔その結果、〕単に世界についての科学的認識の<sup>・</sup>一<sup>・</sup>般<sup>・</sup>的<sup>・</sup>な<sup>・</sup>条<sup>・</sup>件  
を<sup>・</sup>見<sup>・</sup>出<sup>・</sup>す<sup>・</sup>代<sup>・</sup>わ<sup>・</sup>り<sup>・</sup>に、〔人間が〕世界を『理解（認識）』する様々な基本形式を  
それぞれに画定し、そうした諸種の<sup>・</sup>基<sup>・</sup>本<sup>・</sup>形<sup>・</sup>式<sup>・</sup>の<sup>・</sup>一<sup>・</sup>つ<sup>・</sup>一<sup>・</sup>つ<sup>・</sup>を<sup>・</sup>その<sup>・</sup>独<sup>・</sup>自<sup>・</sup>の<sup>・</sup>傾<sup>・</sup>向<sup>・</sup>と  
独自の精神的な形式において捉えるという方法に移行しなければならなかつ  
た。（ECW11: VII<sup>6</sup>、傍点筆者）

補足を加えて換言すれば、これは以下のことを意味している。——数学・自然科学（≡物理学）を科学モデルとして出発した自身の哲学を人文科学の領域にも

適用しようという試みの中で、人文科学が数学・自然科学を模範としなければならない訳ではないということ、また、まして人文科学の言語（＝用語）が数学・自然科学の言語に還元されたり置き換えられたりしなければならない訳ではないということがはっきりと分かって来た。数学・自然科学が確固たる学問であることに変わりはないにせよ、数学的・自然科学的な世界認識の方法以外にも人文科学が対象とする諸種の世界認識の方法というものが存在しているのである。そして、自然科学・人文科学を問わず世界認識の方法それぞれが（相互に還元不可能な）独自の意味体系・論理体系を有しているのである。それをいよいよ明らかに知ることになった結果、自身の哲学は必然的に、自然科学的・人文科学的を問わず多様な世界認識の方法を探ることを主要課題とするに至った。

『実体概念と関数概念』で数学や物理学といった学問を主な対象としていたカッシーラーはこうして、その対象とする学問領域を民俗学、神話学、宗教学、言語学、心理学、生物学などへと大きく広げ、諸種の世界認識の在り方を包括的に探究する彼独自の哲学を構築することとなる。この——親しい人らの回想によれば、カッシーラーが1917年に電車の中で着想を得た、もしくは、最初期の構想を練ったとされる（Gawronsky 1958: 25; T. Cassirer 2003: 120）——哲学こそが、「シンボル形式の哲学」と呼ばれるものに他ならない。

先に見た「(新) カント派」という観点も考慮すると、カッシーラーのシンボル形式の哲学とはつまり、現代の自然科学と人文科学両者の成果に基づいてカント哲学の刷新を図ったものなのである。それではどのような点においてカッシーラーはカント哲学を刷新しようとしたのであろうか。もちろん多岐にわたるカッシーラー哲学の全貌をここで事細かに明らかにすることは出来ないが、重要な数点に絞って以下にそれを説明したい。

### 3.

まずはカッシーラーによるカント哲学刷新の試みの根幹ともいべき人間学という観点から見て行きたい。これに関してカッシーラーは次のような見解を述べている。哲学的人間学における課題、つまり、全生物界において人間のみに固有な本性を問うという課題を歴史上初めて十全な意味で理解し、それを確固たる形で基礎付けようとしたのは外ならぬカントであり、そのカントには、人間学の課

題を自身の哲学の中心に据えようとした時期さえあった。しかし、時代的制約、つまり、当時の学問・知識の不十分な発達の為に、カントはそうした試みを具体的に推し進めることは出来なかった。それが可能となったのはやっと現代（≒ 20世紀）になってからのことである（ECW 16: 106; ECN1: 32-34; ECN 6: 397）。

カッシーラーは——プレスナーやゲーレンなどといった哲学者と同様——シェーラーが産み出した哲学的人間学の潮流に乗って<sup>7)</sup>、彼なりの哲学的人間学を創出した。その根本主張とは、「あらゆる生物の中において唯一人間のみが精神的・文化的能力を有しており、その特異な能力の為に人間のみは生物的束縛——生物的要素・欲求——から（殆ど全く）解放された存在である」というものであるが（ECW 23: 28-29, 39, 124; ECN 1: 38-39; ECN 6: 286, 408, 634; ECN 7: 162-163）、こうした主張は基本的には、シェーラーその他の哲学的人間学の考えと同じものと言って良い（シェーラー 2012; ゲーレン 2008; Plessner 2003）。つまりそれはカッシーラーの哲学的人間学を特徴付けるものではないのである。

そもそも、全生物界において唯一人間のみが精神的・理性的存在者であり、唯一人間のみが動物的本能から解放された存在であるといったような考えは決して目新しいものではない。それは二千年以上の歴史における西洋哲学の主流派の考えとさえ言うて良いように思われる。そうした見方が正しいとすれば、カッシーラー哲学を含んだ20世紀における哲学的人間学の新しさは、人間の唯一無二性・非動物性・精神性という考えを提出したことにあるのではなく、そうした考えを現代諸科学の成果に基づいて、それぞれ独自の仕方で具体化したことにこそあると言うべきであろう。であれば、それぞれの哲学的人間学を特徴付ける上で重要なものは、人間のみ固有な非動物性・精神性というものをそれぞれの哲学者が具体的にどのような形で理解したのかという点になる。

つまり、カッシーラーの哲学的人間学の独自性は、全生物界において人間のみが精神を有する非本能的な生物であるという主張にではなく、人間の非生物性・非本能性はシンボル形成（文化形成）という人間固有の精神的能力に基づいているという主張にこそある。人間とは「理性的な動物」であるという古典的な人間の定義は間違いではないが、それには修正あるいは具体化が必要であるとしてカッシーラーはこう書いている。

現代の非合理主義のあらゆる試みにもかかわらず、理性的動物 (*animal*)

*rationale*) としての人間の定義はその力を失わなかった。合理性は実際、全ての人間活動に内在する特徴なのである。……〔しかし、人間を〕理性的動物と定義した偉大な思想家たちは経験主義者ではなかったし、人間の本性について経験的な説明を与えようとしたわけでは決してなかった。この定義によって彼らはむしろ、〔人間とはこうあるべきであるという〕根本的な道徳命令を表現していたのである。理性という言葉は、それによって人間の文化的生活の諸形態をそれらのあらゆる豊かさと多様性において理解するには非常に不十分な言葉である。……あらゆるこうした〔文化的生活の〕形態は、シンボル形式 (symbolic forms) である。したがって、人間を理性的動物と定義する代わりに、私たちは人間をシンボルを扱う動物 (*animal symbolicum*) と定義すべきである。(ECW23: 30-31)

これはつまり、カッシーラーが新しい経験的・科学的事実を基に、カントの(未完の)人間学を「シンボル形式の哲学」という人間学(=文化哲学<sup>8)</sup>)へと変容させたということの意味している。では、この変容は具体的にはどのような変化を伴っているのであろうか。

先に見た通り、シンボル形式の哲学はカントの超越論的方法論に倣って客観的な経験を可能にする(ア・プリオリな)認識能力を探求することを主要課題としている。そこから容易に推測できるように、カッシーラー独自の人間学の構築=カッシーラーによるカント哲学刷新の主要点は、人間の認識能力の理解に関わっている。

良く知られたように、カントは経験を可能にするための人間の認識能力として、感性、悟性、理性、構想力などといった能力を前提としていたが、カッシーラーはそれらとは異なる認識能力、すなわち、「シンボル機能」や「シンボル形式」と呼ばれる認識能力を想定している。まずシンボル機能と呼ばれる認識能力の方から見れば、これはカッシーラーが同時代の心理学者カール・ビューラーの言語(コミュニケーション)理論を参考に体系化したもので、人間の精神には三つのシンボル機能、すなわち、①情動を伴った認識を可能にする「表情機能 *Ausdrucksfunktion*」、②言語的・概念的認識を可能にする「表示機能 *Darstellungsfunktion*」、③数学・自然科学に見られるような論理的認識を可能にする「意味機能 *Bedeutungsfunktion*」が備わっているとされる(ECW13: 114, 122; ECW17: 261; Bermes

1997: 159)。

こうしたシンボル機能が基となって成立するとされるのが「シンボル形式」と呼ばれる認識能力である<sup>9)</sup>。『シンボル形式の哲学』という主著のタイトルからも分かる通り、カッシーラー哲学においてシンボル機能より遥かに重要なのはシンボル形式と呼ばれるこの能力の方であるが<sup>10)</sup>、ここからはこの後者の能力を主題として、カッシーラーによるカント哲学刷新を多元論という観点から見て行きたい。

上述したように、カッシーラーのシンボル形式の哲学はカントの『純粋理性批判』における試みを出発点としている。また、初めて自身の哲学を打ち出した『実体概念と関数概念』の中でカッシーラーが行ったのは、ニュートン物理学に依拠した『純粋理性批判』を、アインシュタインなどによってもたらされた現代物理学の成果を基に刷新するという試みであった。

このように『純粋理性批判』という著作は、カッシーラー哲学において極めて重要で基礎的な意義を有しているのであるが、彼はカントの他の代表作とされる『実践理性批判』、『判断力批判』を無視した訳ではない。カントのこれらいわゆる三批判書は、それぞれ主に①数学・自然科学(物理学)、②道徳(自由)、③芸術(美および自然・有機体における合目的性)を対象としており、カントはこれらそれぞれの対象ごとにそれぞれ別個の「ア・プリオリな原理」(Kant 1900/1922: 514)を想定していた。であれば、「カント学派」を標榜するカッシーラー哲学の多元論がこうしたカントの多元論に由来していると推測することには何の無理もない。

しかし、カッシーラーはカントの三批判書と同じ区分に従った訳ではない。カッシーラーにおける区分は、人間の認識能力である諸種のシンボル形式に対応している。ではシンボル形式とはなにか。シンボル形式の定義として有名な一節にはこうある。

「シンボル形式」という言葉では、それによって、ある精神的な意味内容がある具体的な感性的記号(目印 Zeichen)に結び付けられ、その意味内容がその記号に内的な形で与えられることとなる、諸種の精神のエネルギーが理解されるべきである。(ECW16: 79)

シンボル形式とはつまり、ごく簡単に言って、感性的現象・事物に対して意味付与を行う精神的な能力のことであるが(ECW11: 6-9)、この能力は一種類では

ない。この能力、つまりシンボル形式の数は確定されていないが、カッシーラー哲学の骨格となっているものだけを挙げれば、神話、宗教、美・芸術、言語、科学があり、これらのシンボル形式はそれぞれ独自の原理にしたがってそれぞれ独自の世界形成を行うとされる。例えば、神話的シンボル形式の形成する世界は「表情」を持つ神々や霊、「表情」を伴った事物が物理法則とは異なる一定の原理に従って躍動する世界であり、宗教的シンボル形式<sup>11)</sup>の作り出す世界は——神話的世界と地続きにありそれと多くを共有しながら——神話的世界には存在しない明白な自己意識とそれに伴う理性的な道徳意識に基づいた世界であり、美的シンボル形式の生み出す世界は、物の形態、色のコントラスト、メロディーの調和などといった感性的形式それ自体が純粋に感じられる世界であり、科学的シンボル形式が構築する世界は普遍的自然法則に基づいた世界である (ECW23)。こうした諸種のシンボル形式 (シンボル形成作用) が、三批判書の区分に基づくカント哲学の多元論とは異なるカッシーラー独自の多元論の骨格をなしている。

これに関連して一言付言してしかるべきは、カッシーラーが——ごく大雑把に言って——、神話→言語／宗教→美 (芸術) →科学というシンボル形式 (= 精神のエネルギー) の歴史的な発展という発想をその哲学体系に取り込んでいたということ、しかも、それがヘーゲルにおける歴史的・弁証法的思考の影響によるものであるということである (ECW12: 275-306; ECW16: 304-311; ECW23: 223; Möckel 2018: 463-492)。カッシーラーは自ら認める「カント学派」でありながら、いやあるいは「カント学派」であればこそ、カント哲学刷新のためには、カント哲学の批判者であるヘーゲルの歴史哲学的要素を取り入れることも躊躇わなかったのである。

#### 4.

以上で、本稿の主題は尽きている。つまり、カッシーラーにおける (新) カント派の意義の解明を通じて、またウィーン学団との対比を手掛かりに、科学性という観点からカッシーラー哲学 (シンボル形式の哲学) の根本特徴と構造とを概略するという本稿の主たる目的は果たされた訳であるが、冒頭でも述べたように、本稿の最後にカッシーラー哲学の今日的意義について簡単に述べておきたい。

先に見たように、カントの哲学的動機と営為とを正しく理解した真のカント主

義者（カントの弟子）であるならば、カント研究のみに留まることなく、現代諸科学の成果に基づいてそれぞれ独自の仕方でもカント超越論哲学の刷新を図るはずであるというのがカッシーラーやナトルプの考えであった。しかし実際のところ、そうした主張が多くのカント研究者たちから賛同を得られるかという点に疑わしいものがある。それは、多くのカント研究者たちからのみならずカント自身からさえも、正統なカント解釈とはみなされないものではないかとさえ思われる<sup>12)</sup>。しかし、カッシーラーらのカント（主義）解釈が正統なものであるかどうかはここでは問題ではない。ここで重要なのは、彼らのカント（主義）解釈が、カントの哲学のみならず、彼ら自身の哲学にも当て嵌まるということである。つまり、諸科学が歴史と共に継続的に進展する以上は、カッシーラーら自身の哲学もまた新時代の科学の成果に基づいて刷新されなければならないのである。それはカッシーラーもはっきりと認識しており、その意味においてこそ彼は自身の哲学を「未来の文化哲学の為のプロレゴメナ」(ECW 22, 137) と称しているのである。

カッシーラー以降における最も大胆なカント哲学刷新の試み、少なくともその一つは、人間の認識能力をダーウィン進化論の観点から他の諸動物の認識能力と同列に捉えようとするコンラート・ローレンツらによる進化論的認識論 (evolutionary epistemology) の試みではないかと思われるが<sup>3)</sup> (Lorenz 1941; フォルマー 1995)、カッシーラーが生きている間にローレンツらのそうしたアイデアに接していれば、断乎として反対したに違いない。というのも、上で触れたように、人間とは——そのシンボル形成能力によって——他のあらゆる生物とは次元を全く異にした唯一無二の精神的・非本能的動物であるというのがカッシーラー哲学の大前提となっていればである。またその上カッシーラーが、当時のドイツ知識人の主流に従って<sup>13)</sup>、ダーウィン進化論に対して批判的・否定的な態度を取っていればである (Hamada 2017)<sup>14)</sup>。

そのように、カッシーラーがローレンツらによるカント哲学更新の試みを糾弾したであろうということは想像に難くないが、しかしそれは、カッシーラーが彼の死後の生物学・進化論の長足の発展を全く知らなかった・知ることが出来なかったという事実を前提とした上での話である。もしカッシーラーが今日の進化論や進化論に基づいた諸科学の成果を知ることが出来ていたとしたら、彼の態度は全く違ったものとなったであろうと想定するのはむしろ自然なことである。(もちろん、これはカントについても同じことが言える (Vollmer 2016: 462)。)

繰り返しになるが、カントの超越論哲学にカッシーラー（ヤナトルブ）が考えるような刷新可能性・科学の発展に対する開放性が内在していることを、カント自身およびカント研究者たちが認めるかどうかは定かではない。しかし、カッシーラー（ヤナトルブ）が、そもそも偉大であるカント哲学をより偉大なものとしているのはその刷新可能性であり、その点にこそカント超越論哲学の尽きることのない「科学性」と「現代性」という長所が存しているのだと考えていたことだけは確かである。

もしカントの超越論的方法論に全く賛同できないというのであれば、そこに依拠するカッシーラーの哲学および——彼の考える意味での——（新）カント派の哲学にはこれといった意義がないとみなすのは当然であろう。また、ハイデガーの様に哲学は諸科学の最新の成果に頼る必要はないと考えるのであれば、カッシーラーの哲学および（新）カント派の哲学から学ぶべきことは少ないであろう。しかし、カントの超越論的方法論に意味を見出すのであれば、また諸科学の発展とその成果を哲学も真剣に考慮すべきであると考えるのであれば、カッシーラーやその他の（新）カント派の哲学から、その長所あるいは短所を通じて知的刺激が得られることを期待しても良いであろう。また更に加えて、カッシーラーの考える（新）カント派の意義に共鳴できるのであれば、カッシーラーの時代からますますの進歩を遂げた諸科学の成果に基づき、カントの批判哲学のみならずカッシーラーのシンボル形式の哲学をも独自の仕方で刷新するよう努めるべきであろう。

## 参考文献

- ゲーレン、アーノルト（2008）、『人間——その性質と世界の中の位置』、池井望訳、世界思想社。
- シェーラー、マックス（2012）、『宇宙における人間の地位』、亀井裕／山本達訳、白水社。
- ハイデッガー、マルティン（1994）、『形而上学入門』、川原栄峰訳、平凡社。
- ハイデッガー、マルティン（1998）、『形而上学の根本諸概念』（ハイデッガー全集第29／30巻）、川原栄峰／セヴェリン・ミュラー訳、創文社。
- ハイデッガー、マルティン（2001）、『存在と時間（上）』、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫。
- フォルマー、ゲアハルト（1995）、『認識の進化論』、入江重吉訳、新思索社。
- 濱田洋輔（2020）、「ダーウィン進化論の観点から見たプレスナー哲学的人間学の根本問題」、『哲学・科学史論叢』22号、51-71頁。
- Bermes, Christian (1997), *Philosophie der Bedeutung: Bedeutung als Bestimmung und Bestimmbarkeit*;

- eine Studie zu Frege, Husserl, Cassirer und Hönigswald*, Königshausen & Neumann.
- Brandt, Reinhard (2016), “Kants Systeme,” in: *Kant-Studien*, 107(4), 681–703.
- Cassirer, Ernst, *Gesammelte Werke. Hamburger Ausgabe*, ed. by B. Recki, Felix Meiner, 1998–2009 (ECW と表記し、続く数字は巻数を示す).
- Cassirer, Ernst, *Nachgelassene Manuskripte und Texte*, ed. by C. Möckel et al., Felix Meiner, 1995 - (ECN と表記し、続く数字は巻数を示す).
- Cassirer/Heidegger (1991), “Davoser Disputation,” in: M. Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, ed. by F.-W. von Hermann, Klostermann, 274–296.
- Cassirer, Toni (2003), *Mein Leben mit Ernst Cassirer*, Felix Meiner.
- Damböck, Christian (2013), “Nachwort,” in: id. (ed.), *Der Wiener Kreis: Ausgewählte Texte*, Reclam, 227–244.
- Ferrari, M. (2003), *Ernst Cassirer. Stationen einer philosophischen Biographie*, trans. by Marion Lauschke, Felix Meiner.
- Friedman, Michael (1999), *Reconsidering Logical Positivism*, Cambridge University Press.
- Friedman, Michael (2000), *A Parting of the Ways: Carnap, Cassirer, and Heidegger*, Open Court.
- Gawronsky, Dimitri (1949), “Ernst Cassirer: His Life and His Work,” in: Paul Arthur Schlipp (ed.), *The Philosophy of Ernst Cassirer*, The Library of Living Philosophers, 1–37.
- Hamada, Yosuke (2017), “Die Sichtweise Ernst Cassirers zur modernen Biologie. Cassirers antidarwinistisches Verständnis der biologischen Evolution,” in: Pellegrino Favuzzi et al., (eds.), *Symbol und Leben. Grundlinien einer Philosophie der Kultur und Gesellschaft*, Logos Verlag, 111–128.
- Heis, Jeremy (2013), “Ernst Cassirer, Kurt Lewin, and Hans Reichenbach,” in: Nikolay Milkov/Volker Peckhaus (eds.), *The Berlin Group and the Philosophy of Logical Empiricism*, Springer, 67–94.
- Heis, Jeremy (2014), “Realism, functions, and the a priori: Ernst Cassirer’s philosophy of science,” in: *Studies in History and Philosophy of Science*, 48, 10–19.
- Husserl, Edmund (1994), *Briefwechsel Bd. V*, ed. by Karl Schuhmann, Kluwer Academic Publishers.
- Ihmig, Karl-Norbert (2001), *Grundzüge einer Philosophie der Wissenschaften bei Ernst Cassirer*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Kant, Immanuel (1900/1922), “Brief an Carl Leonhard Reinhold, 28. und 31. Dezember 1787,” in: königlich preußische (später deutsche) Akademie der Wissenschaften (ed.), *Akademie-Ausgabe*, Bd. X, 513–515.
- Krois, J. Michael (2000), “Ernst Cassirer und der Wiener Kreis,” in: Friedrich Stadler (ed.), *Elemente moderner Wissenschaftstheorie. Zur Interaktion von Philosophie, Geschichte und Theorie der Wissenschaften*, Springer, 105–121.
- Lorenz, Konrad (1941), “Kants Lehre vom Apriorischen im Lichte gegenwärtiger Biologie,” in: *Blätter für Deutsche Philosophie*, 15, 94–125.
- Meyer, Thomas (2007), *Ernst Cassirer*, Ellert & Richter.
- Möckel, Christian (2018), *Die Philosophie Ernst Cassirers. Vom Ausdrucks- und Symbolcharakter kultureller Lebensformen*, Felix Meiner.

- Mormann, Thomas (2016), “Wissenschaftliche Philosophie im Exil: Cassirer und der Wiener Kreis nach 1933,” in: Mathias Neuber (ed.): *Husserl, Cassirer, Schlick*, Springer, 159–179.
- Natorp, Paul (1912), “Kant und Marburger Schule,” in: *Kant-Studien*, 17, Heft 1-3, 193–221.
- Paula Órdenes (2019), “Kants System der Vernunft. Eine theologische Einheit,” in: Paula Órdenes / Anna Pickhan (eds.), *Teleologische Reflexion in Kants Philosophie*, 65–89.
- Plessner, Helmuth (2003), *Die Stufen des Organischen und der Mensch. Einleitung in die philosophische Anthropologie (Gesammelte Schriften IV)*, Suhrkamp.
- Vollmer, Gerhard (2016), *Im Lichte der Evolution: Darwin in Wissenschaft und Philosophie*, Hirzel.

## 註

- 1) ある哲学研究者によれば、ノイラートは何度もカッシーラーをウィーン学団との共同作業に誘ったが、タイミングが合わず計画は水泡に帰してしまったとのことである (Meyer 2007: 222)。
- 2) 本稿の引用は全て本論筆者の翻訳による。
- 3) 「贖罪の山羊」とはここでは、哲学的に劣っている・誤っているというレッテル貼りという程度の意味であろう。ちなみにあるカッシーラー研究者は、カッシーラーはこの言葉をおもむくは冗談めかして言ったのかもしれないと指摘している (Ferrari 2003: 265)。
- 4) カッシーラーは例えば、現代の自然科学における (諸) 基礎概念の解釈について自分が師のコーエンやナトルプと異なる結論に達したことに関してこう書いている。「[そうした意見の対立にも関わらず、] 自分とマールブルク学派の創設者たちとの関係は緩みもしないし、私の彼らに対する恩義が弱められることもない」(ECW 19: 6)。
- 5) この手紙には日付が記されていないが、手紙の内容から1937年5月もしくは6月のものと推測されている (ECN18: 278)。
- 6) ここに関してはECW13: VIIも参照のこと。
- 7) カッシーラー自身は、シェラーを哲学的人間学の先駆者の一人と表現している (ECN 16: 106)。
- 8) カッシーラーの主要著作の一つである『人間』の草稿時点での副題は「哲学的人間学」(A Philosophical Anthropology)となっていた (ECN6: 345)。しかし『人間』が発表された際、その副題は「文化哲学への導入」(An Introduction to a Philosophy of Human Culture)と変更されることになる。こうした事情は、人間学と文化哲学が彼にあってはほぼ同義であることを物語っていると見て良いであろう。
- 9) シンボル機能とシンボル形式の関係について、カッシーラーは詳細に説明してくれていないが、大まかな対応関係があることは教えてくれている。それによると、表情機能は神話的シンボル形式に特徴的であり、表示機能は言語的シンボル形式に特徴的であり、意味機能は科学的シンボル機能に特徴的であるとされる (ECN1: 6)。また美的シンボル形式においては、表情機能と表示機能が同時に働くとされている (ECW17: 267-268)。

- 10) カッシーラーは、シンボル機能ではなく、シンボル形式をこそ生涯に渡っての主題としていた。しかも、カッシーラーがこの三つのシンボル機能という構図を用いていたのは、筆者の知る限り一九二〇年代後半から三〇年代前半の僅か数年のみである。
- 11) カッシーラーがシンボル形式の一種として「宗教」を扱う場合、それは基本、ゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教の一神教(的宗教)を意味している (ECW12: 141-144, 265-266; ECW23: 118; ECN11: 228)。
- 12) カント自身が自分の哲学体系は将来も揺るぐことのない確固とした体系であると考えていたかどうかについては、カントが異なる箇所にも矛盾した説明を行っているため研究者間でも解釈が分かれているようである (Brandt 2016; Órdenes 2019)。
- 13) ダーウィン進化論を批判した当時の著名な哲学者には、シュペングラー、シェーラー、ゲーレン、プレスナー、ハイデガーなどが存在している (ハイデッガー 1998: 410-417; 濱田 2020: 58)。
- 14) カッシーラーは進化論自体を批判していた訳ではない。彼は、生物進化自体は認めていたが、ダーウィン流の進化論には批判的であった (Hamada 2017)。